

1 丹沢大山の自然環境の保全と再生に関する研究開発

- (1) 課題名 1-3 自然環境の統合的な管理技術の研究開発
B ヤマビルの防除技術の開発に関する共同研究
c ヤマビルの生態に関する研究
- (2) 研究期間 平成 19～20 年度
- (3) 予算区分 県単（地域科学技術振興事業 政策課題研究）
- (4) 担当者 岩見光一・谷脇 徹

(5) 目的

近年、丹沢山地周辺でヤマビルによる吸血被害が頻繁に発生するようになり、吸血被害を防ぐための総合対策が求められている。本研究では対策を効果的に推進するためのヤマビルの生態解明を目的として、既存の知見を整理するとともに丹沢における生息環境や密度特性、吸血対象動物調査を実施した。

(6) 研究方法

ヤマビルの生理生態に関する知見の収集整理

既存文献および知見を調査収集し、これまでに把握されたヤマビルの生理・生態に関する取りまとめを行った。

ヤマビルの生息環境調査

清川村の札掛および大洞沢において、沢筋、中腹および尾根筋の地形別のヤマビル生息数を調べた（5分間人おとり法、以下同じ調査法を用いた）。また、ヒノキとスギの幼齢林、スギ壮齢林および広葉樹林の林相別のヤマビル生息数を調べた。

ヤマビルの生息密度特性調査

登山道・遊歩道における生息密度を調べるためライン調査を実施した。東丹沢および表丹沢6地点の登山道・遊歩道において、道沿いに入から0、2、5、10、20m離れた5箇所と、道から林内に0、2、5、10、20m入った5箇所のヤマビル生息数を調べた。また、獣道の有無別の生息密度調査として、北丹沢、東丹沢、表丹沢7地点の登山道・遊歩道において、100mの区間を10m間隔に区切って合計10区を設定し、各区の獣道の有無とヤマビル生息数を調べた。

(7) 結果の概要

ヤマビルの生理生態に関する知見の収集整理

国内の生息分布や生息環境、行動、吸血対象動物などの各項目について既存の知見が整理された。

ヤマビルの生息環境調査

ヤマビルは沢筋で多く出現したが尾根筋では少なく（図-1）、乾燥しやすい尾根筋よりも湿度の高い沢筋に多く生息すると考えられた。林相別のヤマビル出現数には顕著な違いはなかった（図-2）。

ヤマビルの生息密度特性調査

登山道・遊歩道の入口からの距離によって、また、登山道・遊歩道から離れて林地に入ってもヤマビルの出現数が顕著に減少するような傾向はなかった（図-3）。獣道の有無別にみると、ヤマビル出現数は獣道のある区で顕著に多く出現する傾向にあった（図-4）。

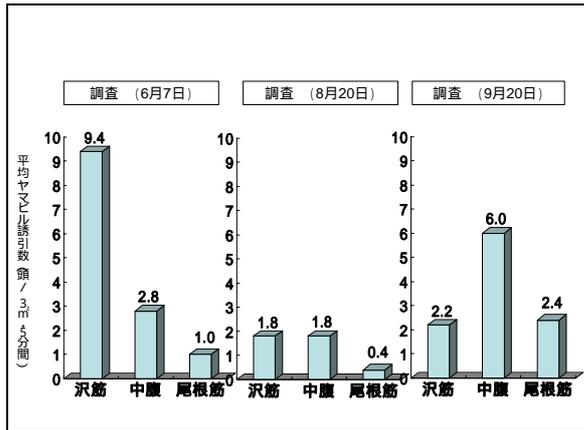


図-1. 地形別のヤマビル生息密度の比較

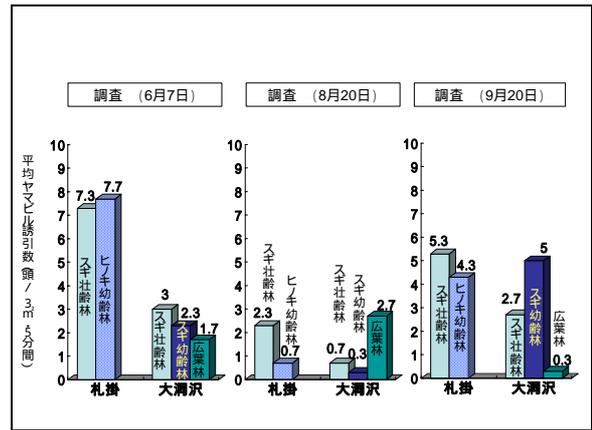


図-2. 林相別のヤマビル生息密度の比較

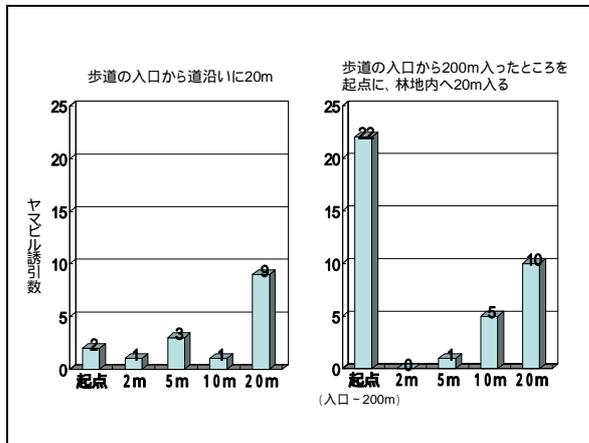


図-3. 登山道・遊歩道におけるライン調査結果

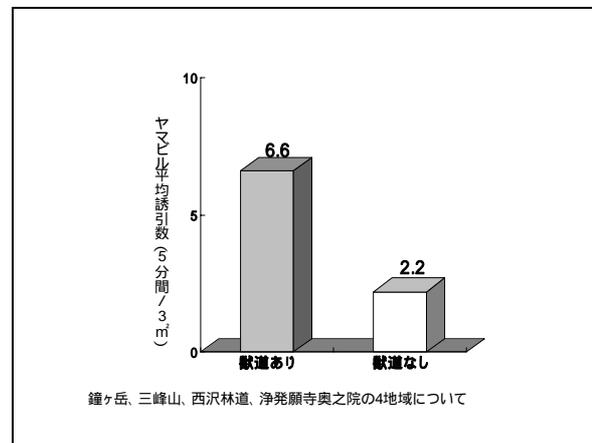


図-4. 獣道の有無別の生息密度調査結果